東京女子医科大学看護学会第２回学術集会　シンポジウム「コミュニティケアを創成するコラボレーション」

# 生活者の支援～地域における保健師の役割と連携のあり方について～

青木　桂子（新宿区健康部西新宿保健センター）

今回のシンポジウムでは、現場の保健師が、活動の場である「コミュニティ」や関係者との「コラボレーション」について日頃考え、感じていることを報告した。

保健師とはどんな仕事なのかと聞かれると、いつも一言では答えられず、もどかしい思いをする。対象は難病・母子・成人・高齢者・精神等多岐にわたり、活動方法も家庭訪問や健康相談、健診等の個や家族への援助から、グループワークや地域でのネットワークづくり等集団への働きかけまで様々である。保健師は「地域で働く看護職」であるが、対象者が地域で当たり前に生活できるよう支援していくとともに、個別の問題から地域全体の健康問題として捉え、システム構築を図る役割もある。また、既存の保健・医療・福祉制度に乗らないグレーゾーンを担っていることも多い。実践の中で発見した問題点、矛盾点を明らかにしていく最前線にいるとも言える。

事例として紹介した近隣住民から相談が入ったケースや必要な医療につながらず、家族内で様々な問題があるケースなどでは、当事者には相談動機や援助希求行為が認められない場合もある。そのような「困難ケース」であるほど、保健師だけでできることには限度があり、地域の様々な関係者が多様な視点を持って関わり、ネットワークを築いて支援していくことが必要である。

地域の生活者を支援していくとき、その人が自分にあった道を自ら選んでいけるように支援していきたいと考える。本人、家族の意思を尊重することは、生活者としての視点にもつながってくるだろう。また関係者とは生活者としての視点を共有していくことが大切である。関係者の温度差をなくしていくには､それぞれの思いを忌憚なく話し合えることが必要である｡風通しがよいということがネットワークがうまく回っているケースの共通点であると感じる。

関係者の連携は昔から言われていることではあるが、昔も今も変わらないことは、人と人とのつながりを大切にすることではないか。特にネットワークを組む時は、最初は時間をとられても、実際に顔をあわせることで、その後のスムーズな展開につながっていく。

今後は、看護職をはじめ関係者が各自の特性を生かせるように、対象者への理解と同様に関係者同士もさらに相互理解を進めていけるとよいのではないかと考えている。